北海道道南方言における入りわたり鼻音に先行される子音について*

島田　武

【要旨】本研究では、北海道道南方言の入りわたり鼻音に先行される子音[ᵐb]、[ⁿd]、[ᵑg]の生起について調査を行った。先行研究によると、これらは道南方言を特徴付けるものだが、衰退している特徴であるとも言及される。このことを確認するために、老年世代の 3 名の調査協力者の音声を録音し、入りわたり鼻音を探索した。その結果、3 種すべての実例が確認できた。また同一環境において入りわたり鼻音が無い例も観察され、さらに生起頻度も後者の方が大きかった。一方、今回の調査では、魚種名に見られる入りわたり鼻音は必ず発音されており、特定の表現においては未だ確固たる存在であることが示された。

キーワード：北海道、道南方言、沿岸部、入りわたり鼻音

1. はじめに

現在北海道で話されている方言は、石垣(1982)の図 1 のように、海岸方言と内陸方言に二分される。通常は札幌方言を代表とする内陸方言が優勢な北海道方言として扱われ、使用されている地域も広大な北海道のほとんどを網羅する。一方、海岸方言は図 2 のように渡島半島を含む道南を要として道北までの沿岸諸地域で話されているが、徐々に主要な特徴を失いつつあると言われている。

筆者を含む室蘭工業大学の教員グループは、近い将来道南地域に特有の方言が失われてしまうという危機意識の元、2000 年から 2016 年にかけて道南の旧椴法華村と 2014 年からはせたな町を訪問し、風習や漁業関連語彙の調査を行ってきている。本稿では道南方言音声の特徴の 1 つと言われる入りわたり鼻音の現状について報告を行う。

*本稿は、2016 年 9 月 2 日に室蘭工業大学において行われた日本実験言語学会第 9 回大会の口頭発表に基づいている。当日の発表において貴重なコメントをくださった方々に御礼申し上げたい。また道南方言の調査に関して、共同研究者である室蘭工業大学の橋本邦彦氏、塩谷亨氏、三村竜之氏に謝意を表したい。本稿における誤り等に関しては筆者のみに帰するものである。

本研究は「旧椴法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」（平成 23 年度科学研究補助金基盤研究(C)課題番号 23520540　研究代表者：橋本邦彦）および「渡島半島東岸部と西岸部における伝統的な漁業関連方言語彙の比較調査」（平成 26 年度科学研究補助金基盤研究(C)課題番号 26370523　研究代表者：橋本邦彦）による助成を受けている。

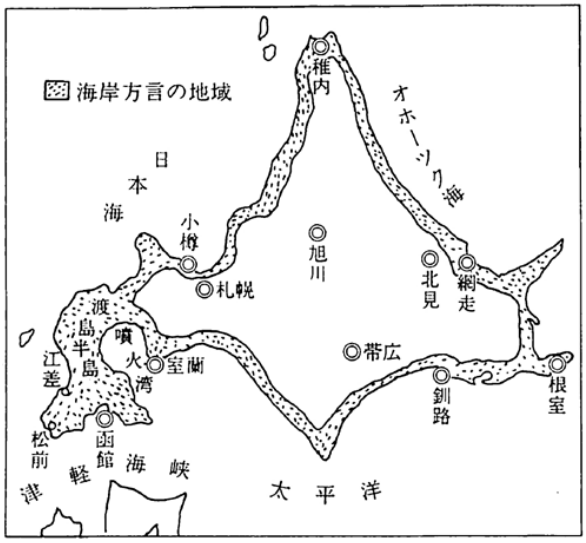

図 1：北海道海岸方言の地域

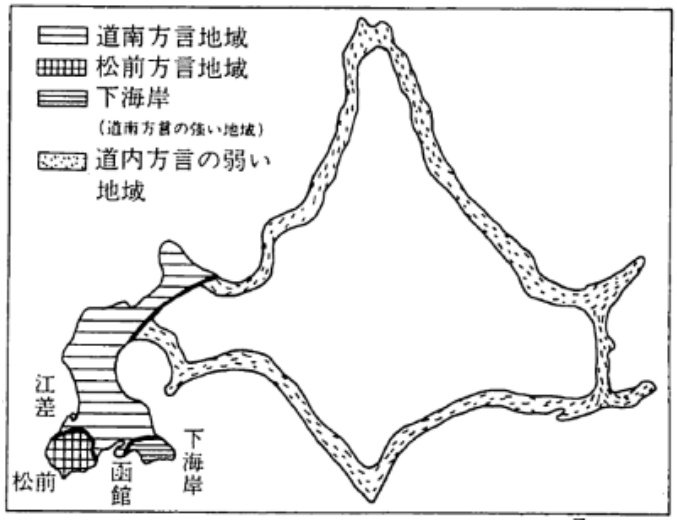

図 2：北海道海岸方言の地域差

2.　道南方言について

2.1　先行研究

いわゆる北海道方言の調査は戦前から行われており、例えば 1936 年に平山輝男によって始められた調査は、1951 年まで 8 回にわたって行われている。平山 (1953)によると、その過程で札幌や旭川を中心とする内陸方言は俗に「標準語と同じ」ということも聞かれたという。一方道南方言を含む海岸方言に関しては、「青森県方言などに近い東北方言に属するもの」であるという研究者もいた(柴田 1953)。確かに道南方言には東北方言と共通する特徴があるが、その後調査研究が進むにつれて、五十嵐(1982: 17)で記されているように、

> 北海道の南部のことばは、かなり広い範囲にわたって、津軽・秋田・新潟・石川の影響を受けて、多かれ少なかれそれらを基盤としてできた道南共通語である

という意識が形成されてきた。

2.2　道南方言の入りわたり鼻音について

上で見たように道南方言には東北方言と共通した特徴が見られるとされるが、その 1 つに入りわたり鼻音がある。入りわたり鼻音とは、有声閉鎖音の[b][d][g]が[ᵐb][ⁿd][ᵑg]として現れる現象である。例えば「窓」[maⁿdo]と「的」[mado]、「井戸」[ïⁿdo]と「糸」[ïdo]のように入りわたり鼻音の有無で区別されるミニマルペアがある。しかし石垣(1959)では道南の江差方言では、やや衰えつつあるという記述があり、石垣(1982)ではほとんど聞かれなくなったという記述がある。そこで本稿では道南方言の中から椴法華方言とせたな方言を取り上げ、入りわたり鼻音の生起について考察を行う。

3. 方法

3.1 調査協力者

調査協力者は以下の 3 名にお願いした（敬称略）。椴法華方言：彦野勇輔（1924 年生まれ）、玉村栄吾（1926 年生まれ）およびせたな方言：西田栄（1925 年生まれ）の方々である。3 名とも男性で彦野氏と西田氏は元漁師、玉村氏は元船大工である。それぞれ老年層の話者ということになる。

3.2 機材及び音声分析方法

音声及び映像の記録はそれぞれの話者に質問を行い、回答の内容を語った発話を SONY 社製 HANYCAM DCR-SR100、HRD-CX535 を用いて自然傍受法で行った。その後 PC 上で音声をサンプリング周波数 44.1KHz、量子化ビット 16 ビットで WAV ファイルとして抽出した。その後、各話者 2 時間分の音声を聴取しつつ、入りわたり鼻音の生ずる環境を探索し、鼻音の有無、生じていた場合は Praat による観察を行った。ただし発話の自然さを重視し、録音を自然傍受法に依拠したため、屋外で録音したりして音声の状態が良くない場合もある。そのため詳細な音声分析は行わず、主に原波形とインテンシティー曲線に注目し、スペクトログラムは参照するにとどめた。

4. 結果と考察

調査の結果は以下の通りである。

(1) 入りわたり鼻音は[ᵐb][ⁿd][ᵑg]の 3 種類とも存在することが確認できる。ただし[ᵑg]は[ᵑŋ]となっている。
(2) 入りわたり鼻音がない例も多い。[ᵐb][ⁿd][ᵑg]はそれぞれ[b][d][ŋ]となる。

今回調査した 3 名について、少なくとも 1 例は入りわたり鼻音の発話が観察できた。しかし同一環境であったとしても入りわたり鼻音が発話されない場合のほうが多く観察された。また同じ椴法華方言話者でも、彦野氏の発話には入りわたり鼻音が多く観察されたのに対し、同年代の玉村氏の発話にはほとんど観察されなかった。せたな方言に関しては、入りわたり鼻音の頻度はかなり少なかったが、皆無というほどではなく、とくにカジカ類のトウベツカジカに相当するものをトンベツカンツィカ[toᵐbetsʉ̥kaⁿtsɨ̥ka]と発音し、下線部にある部分では複数回の発話を観察しても入りわたり鼻音が必ず現れた。

以下では入りわたり鼻音が現れた具体例をいくつか挙げる。

4.1　玉村氏の例

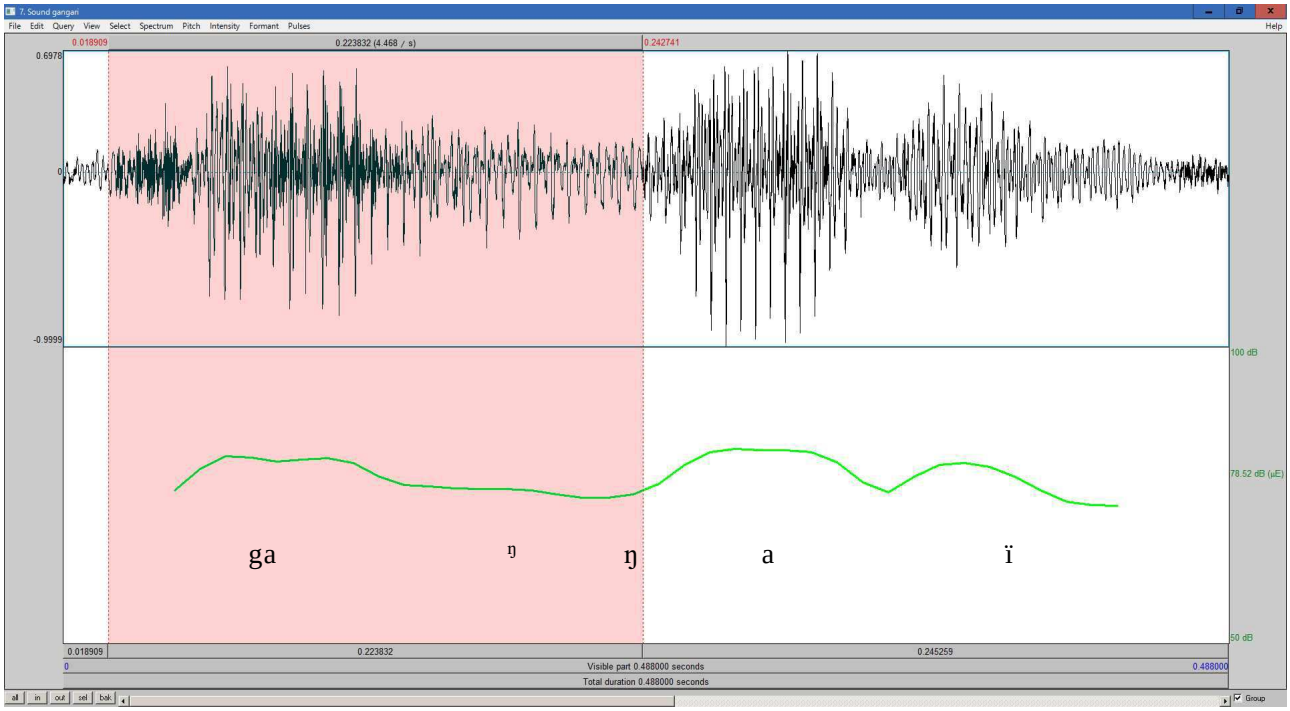

図 3：「ガンガリ」[gaᵑŋarï]（和船を作るときに使うのこぎりの一種。ガガリともいう。）

図 3 は今回観察した玉村氏の発話の中で、唯一入りわたり鼻音と考えられる例である。反転した部分がガンガリの「ガ゙」に相当する。ただし他の話者の例と比較すると、継続時間が長めであり、入りわたり鼻音ではなく、通常の鼻音と考えることも可能である。

4.2　彦野氏の例

彦野氏は、玉村氏と同年代に当たるが、対照的に今回の調査協力者のなかでは最も多くの入りわたり鼻音を使用していた。以下に例を挙げる。

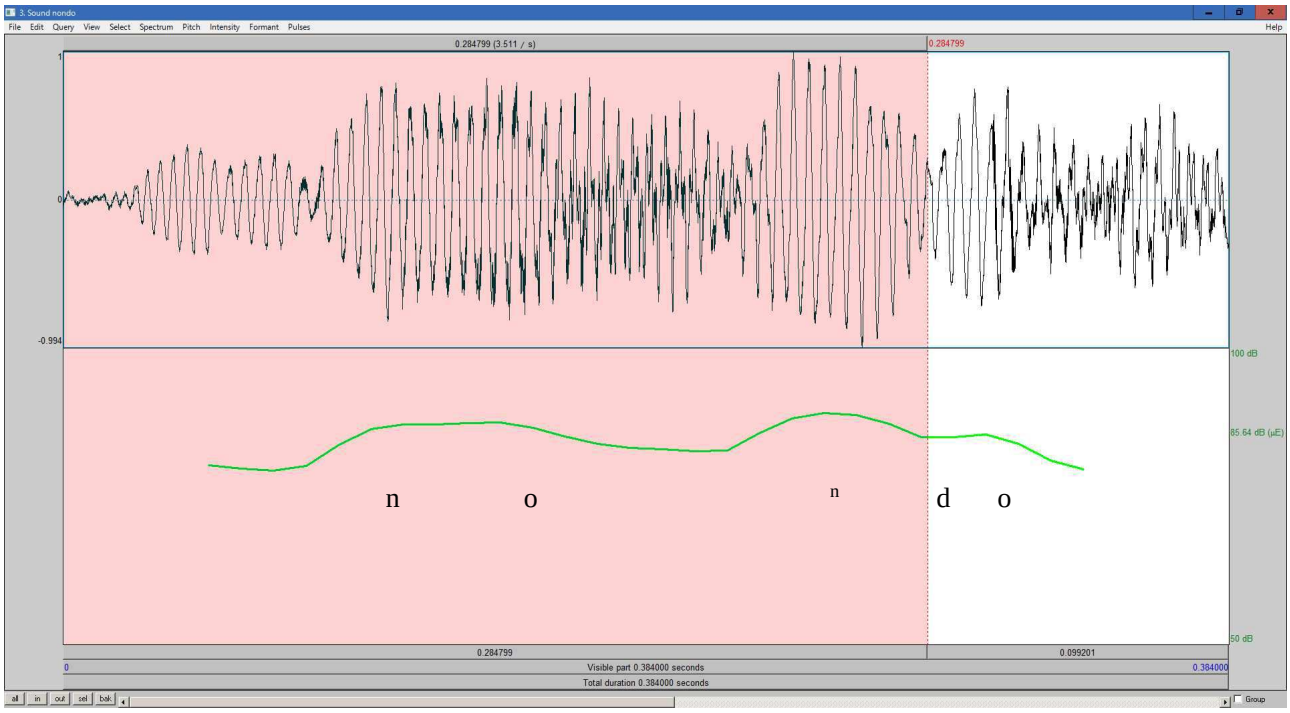

図 4：「ノ゛ド」[noⁿdo]　のど

図 4 は「のど」に対応する発話で、「ド」の前に入りわたり鼻音がある。図の反転した部分に着目すると下段のインテンシティー曲線の 2 つめの山の部分が入りわたり鼻音に当たる。以降の彦野氏の例でも観察されるが、入りわたり鼻音はその前の母音のインテンシティー曲線とは独立して凸型の曲線を描くことが多い。

その例として図 5 と図 6 に「数の子」の例を挙げる。

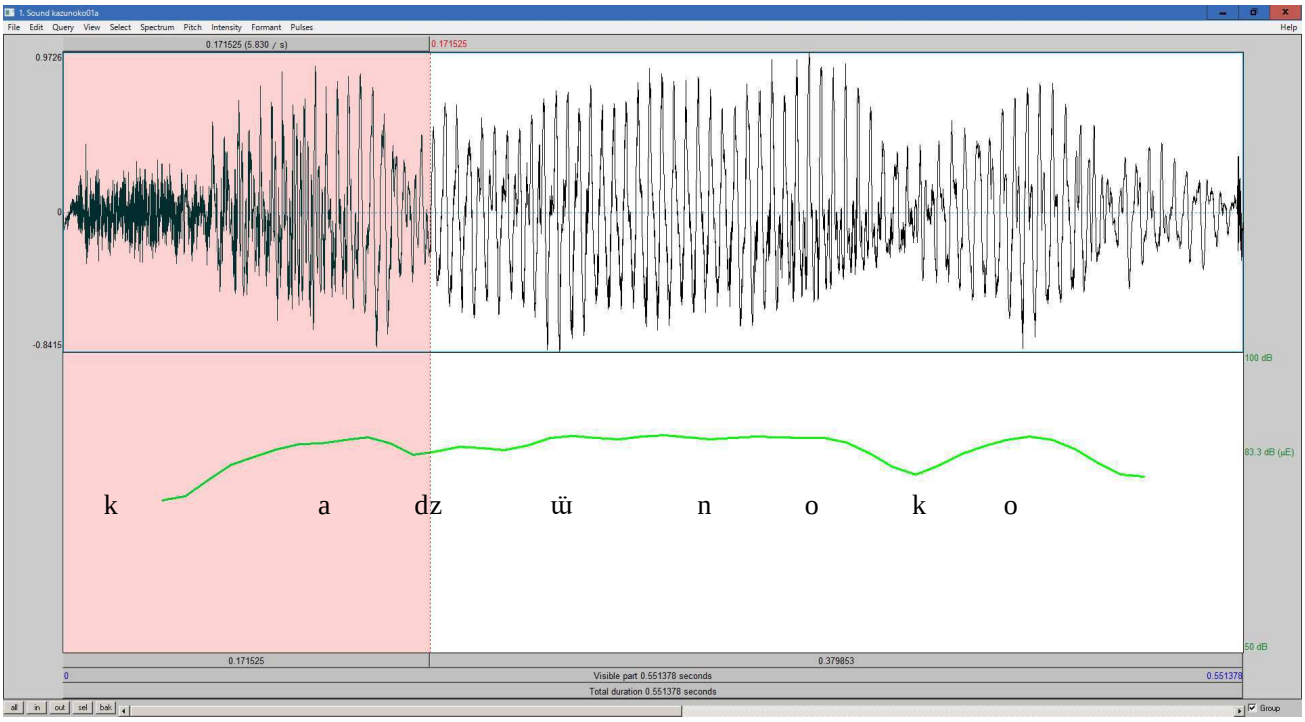

図 5：「カズノコ」[kadzɯ̈noko]　数の子

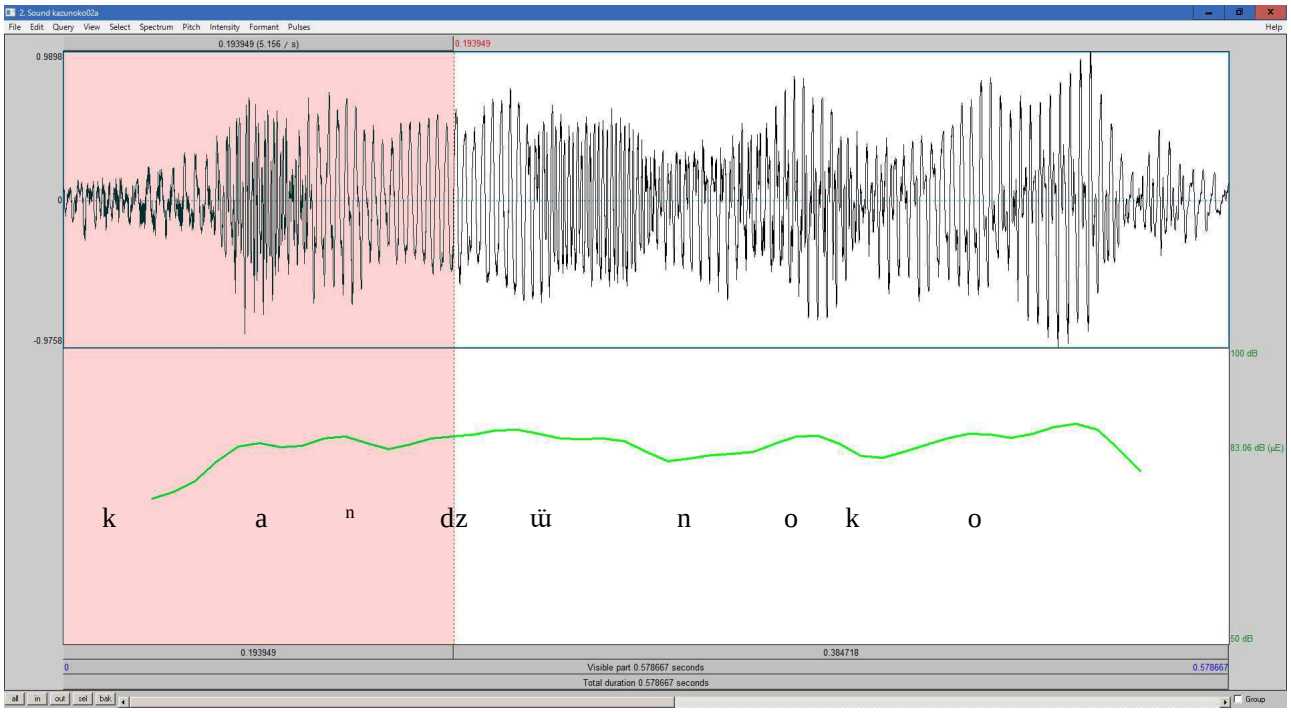

図 6：「カ゚ズノコ」[kaⁿdzɯ̈noko]　数の子

図 5 では、入りわたり鼻音の無い[kadzɯ̈noko]で、図 6 では、入りわたり鼻音のある[kaⁿdzɯ̈noko]として発話されている。反転されている部分を対照させると、図 5 は下段のインテンシティー曲線の山が 1 つなのに対し、図 6 では、図 4 と同様に山が 2 つになっていることが分かる。

4.3　西田氏の例

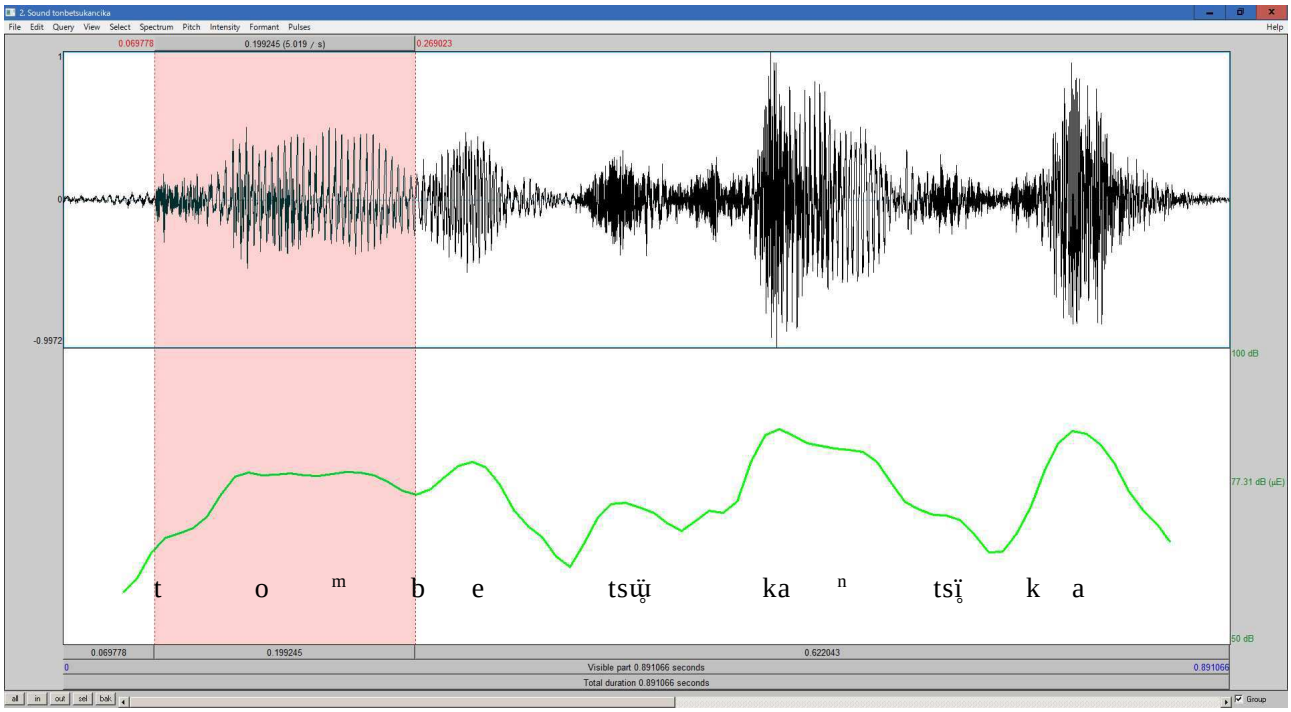

図 7：「トンベツカンツィカ」[toᵐbetsʉ̟kaⁿtsɪ̟ka]の「トン」

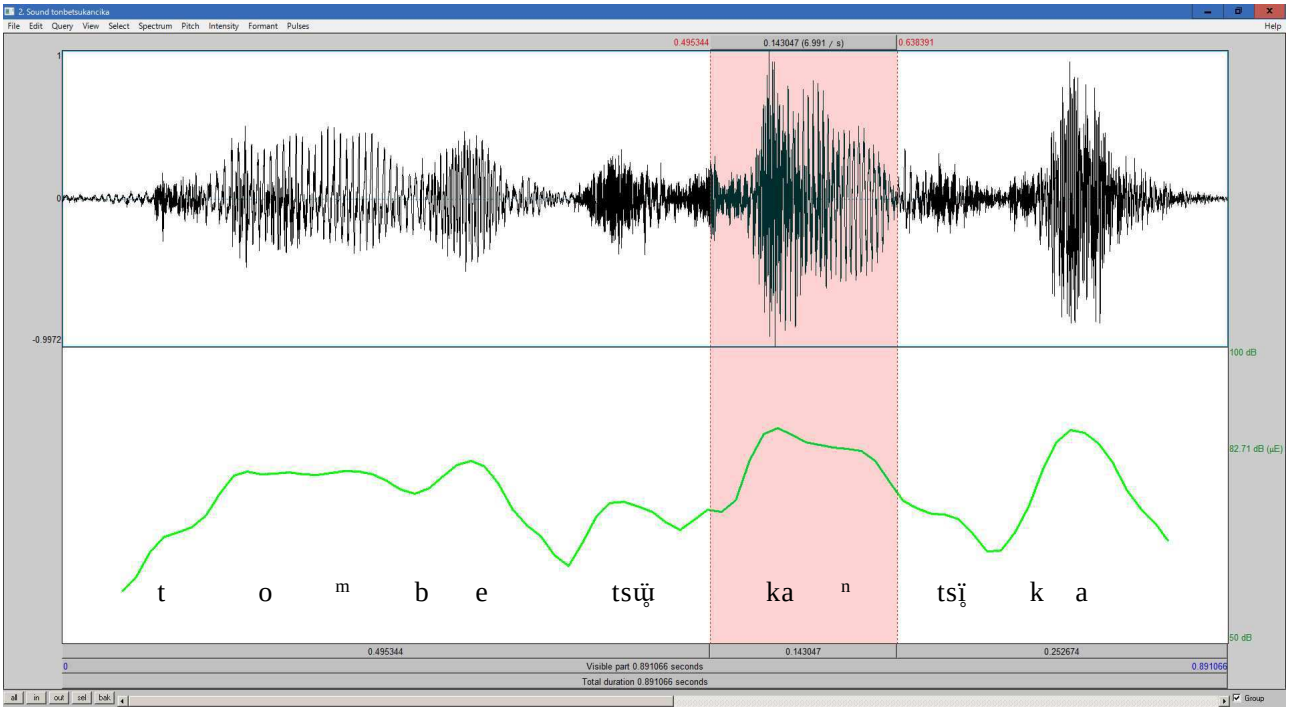

図 8：「トンベツカンツィカ」[to^{m}betsɯ̟ka^{n}tsɨ̟ka]の「カン」

図 7 と図 8 は西田氏の発話の中で必ず入りわたり鼻音が現れた例である。また 1 語内に 2 つ現れている例でもある。

5. 結語と展望

本稿では道南方言の入りわたり鼻音の生起について樺法華方言とせたな方言を取り上げて観察を試みた。かつては道南方言の特徴の 1 つと言われていたが、現在はごくまれに聞かれる程度にまで弱い特徴となっている。ただし魚の名前などには現在もはっきりと残っていることが分かった。今回は老年層の話者を対象に調査をしたが、さらに若い世代に調査をすることで入りわたり鼻音の動向を明確に示せると考えられる。

入りわたり鼻音に関連しているが、今回扱わなかった現象として連濁がある。東北方言での報告では、連濁をすると入りわたり鼻音が現れるとされる[1]。しかし樺法華方言およびせたな方言において、これまでの調査の範囲では連濁で入りわたり鼻音が観察されていない。この点では、本稿で観察した傾向と同様であると言える。ところが、以下の(3)-(6)の例のように本来連濁すると有声化すると予測される音が無声音として現れている例がある。「*」のついた形式は実際には現れないが、連濁すると現れると予想される形式である。

(3) オッパイパリ　*オッパイバリ
(4) ナンダッパリ　*ナンダバリ
(5) ケッパリ　*ケバリ
(6) ジョロコパリ　*ジョロコバリ

[1] 福盛貴弘氏のご教示による。

これらの例は、橋本(2014)で報告されたもので、調査時に 78 歳の漁師の方から採取したものだが、一貫して「～パリ」という形式を用いていた。音声上の特徴としては「パ」にアクセントがあることと、[pʾarï]のように喉頭化した無声両唇閉鎖音として具現していたことがある。

本稿で観察したように、単純に入りわたり鼻音が消失しただけであれば、連濁した音声は有声音として現れると予想されるが、(3)-(6)の例では喉頭化した無声両唇閉鎖音になっている。今後は入りわたりの鼻音と喉頭化した無声両唇閉鎖音の関連についても調査が必要である。

【参考文献】

五十嵐三郎 (1982)「北海道方言の概説」飯野毅一・日野資純・佐藤亮一編 (1982)『講座方言学　4 －北海道・東北地方の方言－』国書刊行会

石垣福雄 (1959)「北海道檜山郡江差町」国立国語研究所編 (1959)『日本方言の記述的研究』明治書院

石垣福男 (1982)「北海道沿岸部の方言」飯野毅一・日野資純・佐藤亮一編(1982)『講座方言学　4 －北海道・東北地方の方言－』国書刊行会

柴田武 (1959)「北海道に生まれた共通語」『言語生活』昭和 34 年 3 月号.

橋本邦彦 (2014)「椴法華村における「漁具」、「漁法」、「魚種」、「魚加工」に関連した方言語彙について」『室蘭工業大学紀要』64：85-97.

平山輝男 (1953)「北海道方言の性格とその研究の意義」金田一京助・金田一博士古稀記念論文集刊行会編 (1953)『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂. 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編 (1994)『日本列島方言叢書①　北海道方言考』3-20. ゆまに書房

On Prenasalized Stops in Dialects of Southern Hokkaido

Takeshi SHIMADA †

This paper examined three prenasalized stops [ᵐb], [ⁿd], and [ᵑg] in Todohokke dialect and Setana dialect of Southern Hokkaido. The existence of those sounds has been thought to be one of the characteristics which distinguish the dialects from Standard Japanese, while the sounds has been reported to occur less frequently, even in conversation performed by elderly speakers.

The free utterances of three participants were recorded and the prenasalized stops were searched for. A small number of examples of each sound were confirmed in the utterances. In the same environment, however, non-prenasalized variants [b], [d], and [ŋ] were also observed more frequently.